

# 短期海外語学研修における参加者の気づき

## — 異文化理解教育の観点から —

Participants' Awareness in the Short Foreign Language Study Abroad Program

— Perspectives of Intercultural Education —

中川 典子\*

Noriko Nakagawa

本稿の目的は、2007 年度夏季に流通科学大学で実施された短期海外語学研修の参加者が、研修を通じて、いかなる気づきを獲得したのかを、異文化理解教育の観点から調査し、考察することであった。具体的には、参加者へ実施したインタビュー調査の内容を、PAC 分析 (Personal Attitude Construct) という個人別態度構造を測定する手法を用いて分析し、得られた結果を異文化理解教育の鍵概念である認知、情動、態度・行動変容の側面を中心に探索し、報告した。

キーワード：短期海外語学研修、気づき、異文化理解教育、PAC 分析

### I. はじめに

文部科学省の資料<sup>1)</sup>によると、海外の大学等へ留学する日本人の学生数は年々増加傾向にあり、平成 14 年度には 7 万 9 千人に達している。一方、世界の主要国における留学生受け入れ人数の推移を見ると<sup>2)</sup>、1983 年の調査以来、他国に比べて米国が群を抜いており、日本を含め、いかに多くの国の人たちが米国を留学先として選択しているかがわかる。短期海外語学研修に関しては、現在、日本の約 7 割の大学が実施しているという実情がある<sup>3)</sup>。ちなみに、アメリカの英語研修プログラム (Intensive English Program) における日本人留学生数は、2005 年までの過去 20 年間、国別で第 1 位を占め、それ以降は韓国が 1 位となったものの、現在、全体で 2 位 (2006-2007 年で約 17%) の位置を占めている<sup>4)</sup>。

流通科学大学では長年に渡り、毎年夏季に約 4 週間米国でホームステイを体験しながら、現地の大学で英語およびアメリカ文化を学習するプログラムを提供してきた。2007 年度からは、研修地を従来のカリフォルニア州バーバンク市から、オレゴン州ポートランド市に移し、昨年は総勢 20 名の学生が本学の提携校であるポートランド州立大学で実施された短期語学研修プログラムに参加した。本稿では、今回の研修を通じて参加者がいかなる「気づき」を獲得したのかを、異

---

\*流通科学大学サービス産業学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町 3-1

文化理解教育における主要な要素である認知、情動、および態度・行動変容の側面から探索する。

## II. 異文化理解教育としての短期海外語学研修

入国管理局の統計<sup>5)</sup>によると、現在日本に定住、または長期滞在しながら働く外国人は、2007年末で215万人を超え、過去最高を記録した。これは日本の総人口の1.69パーセントを占め、10年前(平成9年末)に比べて45.2パーセントの増加を示している。ここから言えることは、たとえば海外に足を運ばずとも日常生活の場面で私たちは既に異文化体験をする機会を与えられているということである。現在、異文化理解が重要な課題となっている理由は、異文化接触が日常的に起こり、異なる文化の人々に対応していかなければならない状況に、我が国が、今、まさにあるからである。

「異文化理解教育」とは、「異文化への関心を高め、自他の文化への理解を深める学習を通して、自他の文化を尊重し、文化的背景を異にする人々と共に学んだり働くことができる能力を養うことを目的とした教育」<sup>6)</sup>を意味している。井下は、異文化理解教育の目的と意義を以下のように指摘している。

たとえば、地球環境の保全、地球社会の存続維持と発展、相互依存性の高まりと関係性の維持、さまざまな格差の是正、地球規模の諸問題の発見と分析および問題解決、誤解や偏見による衝突・紛争の回避、国際間・地域間の利害調整と交渉および合意形成などに役立つ人材の育成を目的としている。<sup>7)</sup>

異文化理解教育と外国文化教育の違いは、後者は特定の国を取り上げてその国についての理解の促進を知識吸収を通じて行うのに対して、前者は、異質な文化的背景をもつ人々との関係形成能力を身につけるための態度やスキルを育成するところにある。そのために、異文化理解教育で重要なことは、個人が自己と異質な文化的背景に「気づく」という点である。それと同時に、自分がそれまで慣れ親しんできた文化が、相手からみるといかに異質な文化にみえるかという相手の視野への「気づき」である。<sup>8)</sup>

他方、異文化トレーニングは、「文化的背景の異なる人々により効果的で良好な相互作用、コミュニケーションを行うことを助けるためのプログラム」<sup>9)</sup>、あるいは「異文化への気づき、異文化に応じた適切な行動とスキル、そして異文化に対する肯定的な視点を育成するために考案された一連の活動」<sup>10)</sup>と定義される。八代は<sup>11)</sup>異文化理解教育における異文化トレーニングの重要性を指摘しているが、それは異文化理解が、現在、知識レベルの範囲を超えて、生活の現場で必要になってきているからに他ならない。異文化トレーニングでは、異文化の状況で自分がどのように感じ、反応するかを知ること(自己への気づき)が第1の目的であり、次にある行動の異文化での意味づけを理解すること(異文化への気づき)につなげていくことが重要なポイントとなる。また、異文化トレーニングでは、知識(認知)、感情(情動)、行動(態度)をバランスよく導入したトレーニングが実施され、そこではいわゆる体験学習(experiential learning)が重視される。

ベネットはトレーニング・モデルを考察するためのモードとして、目的面で、認知的、感情的、行動的の3点を挙げている。<sup>12)</sup>異文化トレーニングでは、この3つの要素すべてが含まれていることが不可欠であり、行動に重点を置きすぎたり、感情だけを扱うトレーニングは有効ではない。また、必要な情報を与えないで、感情や行動を扱うトレーニングは行えない。

本学における短期海外語学研修は、他のコースと同様、大学のカリキュラムの中で単位が認定される授業科目として位置づけられている。研修内容は、渡米前の事前研修、現地の大学での研修とホームステイ、そして、帰国後の事後研修から構成されており、事前および事後研修は、通常の授業スケジュールの中に組み込まれている。但し、短期語学研修と他の授業とでは、学生に対する評価の際の着眼点に大きな違いがある。すなわち、通常の授業では、教師が学生に知識を伝達し、その情報に基づいて、学生が何らかのタスクに取り組み成果を示すことによって評価が与えられる。他方、語学研修では、通常の授業形態で見られるような個人作業が中心となるのではなく、チームワークおよび、団体行動の重要性を自覚し、自ら行動を律することができるかが授業としての研修の成果を問う重要なポイントであり、このことが学生に対する評価に反映される。このような視点がやがては現地における充実した研修と参加者の安全へとつながり、研修そのものを成功に導く鍵となる。事前、事後研修では、指導教員の指導のもと、授業に参加するが、あくまでも主役は参加学生であり、指導教員は知識を伝達するいわゆる「教師」ではなく、ファシリテーター（援助者）としての役割を担っている。異文化トレーニングにおいて、ファシリテーターの役割が重要であるように、短期海外語学研修における指導教員の役割の重要性がここにある。個人留学と大学が主催する研修との違いは、まさにここにあると言える。以上より、事前、現地、事後研修を提供することによって、学生たちに異文化を体験させる短期海外語学研修は異文化理解教育の中の異文化トレーニングの一翼を担っていると断言しても過言ではなからう。

### Ⅲ. 海外語学研修および異文化交流プログラムにおける成果

#### —過去の文献調査から

海外語学研修あるいは異文化交流プログラムは、長年に渡り、多くの大学で実施されており、論文や報告書の形で、その成果や今後の課題などが報告されている。ここでは、特に研修の意義や異文化理解教育の重要な要素である認知、情動、態度・行動変容に着目した研究結果の幾つかを紹介する。

まず、海外研修の意義に関して、福本<sup>13)</sup>は、4週間のニュージーランド短期語学研修およびホームステイプログラムの参加者の帰国後のレポートを分析し、研修は異文化の中であらためて自国の文化を客観的に見つめる契機を与えたと報告している。また、桂<sup>14)</sup>は、6地域で実施された海外語学研修の参加者137名を対象に、アンケート調査を実施し、海外文化・語学研修プログラムに参加した学生の自己評価の集計をもとに、プログラムが学生の外国語習得や国際理解・異文化理解、ひいては個人の価値観や人生観にどのような影響を与えたのかを分析、考察した。その結

果、海外語学研修の意義として、(1) コミュニケーションとしての語学を勉強したいという学習意欲が高まる、(2) 異文化に対する感受性を高め、物事の認識の柔軟性が高まり、国際性を身につけられる、そして、(3) 研修先の歴史、美術、政治社会制度、環境、地理、などの観察力を養い、物事の認識を高めるという3つの意義があることを明らかにした。<sup>15)</sup>

次に、海外短期異文化間交流において、参加者がどのような文化的相違を認知し、情動変化を体験したかを調査した一連の研究について紹介したい。小池<sup>16)17)18)</sup>は、日本人高校生を対象に5カ国、5地域で実施された2週間の海外短期異文化間交流を(1) 研修全体、(2) 現地学校文化の体験、(3) ホームステイ体験という3つの側面に着目し、観察された参加者の文化的認知と情動変化の観点から海外短期異文化間交流プログラムの成果について報告している。

参加者に対するアンケート調査の結果、まず、研修全体を通じて、「交通」に関する驚きの報告がトップを占め、「食事」、現地の人々の「行動特性」や住環境に関する違いに対する認知が報告された。次に、学校という状況下における文化差に対する認知については、交流した現地の高校生パートナーが通う学校が提供するカリキュラムや参加した授業で扱っていた授業内容、授業方法、生徒の参加態度、施設、教育制度など、比較的目に見えやすい内容に対する気づきが指摘されていた。また、ホームステイを通じたホストファミリーとの交流からは、食習慣、家族関係、親の子供に対する扱い方、家族で過ごす時間の長さ、風呂やトイレなど家の機能および時間の使い方に関する違いへの気づきが報告され、食習慣に対する違いがもっとも認知されやすかったと述べている。

他方、情動変化に関しては、肯定的な情動面の報告が多く、否定的な面は比較的少なかったという報告がなされた。具体的には、研修全体を通じて、肯定的な情動を引き起こした出来事は、「ホストファミリーとの生活や、会話」、「パートナーとの会話・交流」、「ローカルの人々とのふれあい」などである。学校文化に関しては、「授業内容」、「授業方法」、「生徒の授業態度」、「学校の施設」、「食事」があげられていた。ホームステイ先で好ましく感じたこととしては、「家族関係」、「家族で過ごす時間」、「家について」、「食習慣」、「ホストファミリーの自分に対する扱い」があげられており、なかでももっとも肯定的に感じた高校生が多かった回答は「家族関係」であった。一方、否定的な情動を感じた出来事について、研修全体、現地学校文化の体験、ホームステイ体験のすべての側面において共通していた事柄として、自由に英語を使えないことがあげられていた。

最後に、異文化体験による参加者の態度変容に関して、異文化接触状況における滞在国あるいは現地の人々に対するイメージの変化に関する調査報告がある。例えば、岩男<sup>19)</sup>は、在日留学生と在米日本人留学生を対象に、各々、日本(人)と米国(人)に対するイメージが滞在中にどのように変化するのかを調査した。その結果、在日留学生の日本に対するイメージが滞在期間とともに悪化していくのに対して、在米日本人留学生の米国に対するイメージは、渡米直後は悪化するが、その後、安定した好意的評価となることを明らかにしている。

上記の調査は、現地に長期滞在する留学生を対象にしたものであるが、短期語学研修についても同様の変化が見られたことを示した報告がある。例えば、徳井<sup>20)</sup>は、1ヶ月の米国短期語学研修の参加者の研修前後における米国に対するイメージの変化を調査し、米国人に対するイメージが否定的なイメージから肯定的なイメージへと変化したことを報告している。また、事前アンケートでは相手の捉え方が「外見で捉える傾向」、「集団、国、民族として捉える傾向」、「相手に対する自己の感情として捉える傾向」が見られたのに対して、事後アンケートでは、「(個人としての)相手の生き方、態度、人生観として捉える傾向」、「多様性に言及する傾向」が見られるなど、相手のイメージの捉え方に変化が見られたと指摘している。そして、このような結果を鑑みて、1ヶ月の研修生活を経て、相手のイメージを捉える視点に変化が見られたことは、研修が語学能力の向上だけでなく、異文化間能力の育成という意味でも重要な意味をもつことを証明していると指摘している。

以上、過去の文献調査から海外語学研修や異文化交流プログラムの意義を概観した。以下に、今回の調査結果を報告する。

#### IV. 研修参加者プロフィールとプログラムの内容

##### 1. 参加者プロフィール

今回の研修には1回生から4回生までの20名(男子4名、女子16名)が参加した。参加者の詳細なプロフィールについては、表1を参照されたい。事前研修で実施した渡航前アンケートの結果、過去に海外経験があると回答した参加者は12名いることがわかった。渡航地域は、韓国、中国、台湾、タイ、マレーシア、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ、イギリスであり、滞在期間は3日~2週間であった。

表1 参加者のプロフィール

項目	性別		学年(回生)				海外経験	
	男	女	1	2	3	4	有	無
人数	4名	16名	1名	9名	9名	1名	12名	8名

##### 2. 研修プログラムの内容

事前研修は、研修参加者決定後の2007年5月16日から7月4日までの計8回実施された。研修の1回分は90分の授業時間枠内で行われ、内容は、旅行業者によるパスポート取得や海外旅行保険など、事務手続きに関する説明、ホストファミリー決定のための資料として現地の大学に送る参加者のプロフィール作成、渡航前アンケート実施、英語での自己紹介、研修参加目的と現地での心得に関するグループ討議、入国時およびホームステイや現地の語学の授業で役立つ英語表現などの英語学習であった。また、ホームステイ先での心得を扱ったビデオを見ながら、アメリ

カ人の生活様式について学ぶ「文化特定」<sup>21)</sup>学習および、「文化一般」<sup>22)</sup>学習の一環として異文化シミュレーションを実施した。上記の学習の他、参加者間の交流を深める目的で、渡米前に大学近隣のセミナーハウスで1泊2日の合宿を実施した。

現地研修は、2007年8月27日から9月18日までの23日間に渡って実施された。研修地は、オレゴン州ポートランド市にあるポートランド州立大学（Portland State University）である。大学には International Educational Program Office があり、PSU 独自で開発した海外研修プログラムや海外の各大学の要望にそったカスタマイズのプログラムを提供している。（昨年度実施した本学のプログラムの詳細については付録を参照されたい。）

参加学生は週末を除く5日間、午前中に3時間、午後には3~5時間の語学あるいはアメリカ文化に関する授業を受け、週末は各自、ホストファミリーと共に過ごした。また、平日の午後には大学近隣の美術館や景観地を訪問するフィールドトリップが実施された。そして、研修最終日3日前には、シアトルマリナーズの試合を観戦する半日バスツアーが実施された。

帰国後の事後研修は、2007年9月26日から12月12日までの計12回実施された。ここでは、研修成果の報告を目的として、10月に開催された大学祭に出典する展示物や研修に参加した学生の体験談を文集の形にした研修冊子の作成を行った。これらは、すべて参加者による共同作業により実施された。

## V. 研究方法

### 1. 調査対象者と調査方法

#### a. 調査対象者

今回の調査の対象となったのは、研修後、インタビュー調査に協力を得ることができた8名である。事前研修で実施したアンケートでは、全員が参加目的として積極的、かつ、肯定的な内容を記入していた。しかし、帰国後の第1回目の事後研修で全参加者に口頭で尋ねた研修についての感想や、各参加者が研修冊子に執筆したエッセイから、実際には出発間際まで参加を迷っていた学生や、必ずしも自らの意志で参加したのではなかった学生など、彼らの本音を垣間見ることができた。そこで、一貫して積極的な参加姿勢を示していた学生と当初は参加に消極的であった学生、各4名ずつ、計8名にインタビュー調査への協力を依頼したところ快諾を得た。調査に要した時間は1名につき1~1.5時間。調査は2007年11月末から翌年の1月にかけて、筆者の研究室で実施された。

#### b. 調査方法

今回の調査で、使用した方法は、PAC 分析と呼ばれる手法である。PAC とは Personal Attitude Construct（個人別態度構造）の略で、個人別に態度構造を測定するために、信州大学の内藤哲雄氏により、開発された手法である。<sup>23)</sup>この手法では、(1) 当該テーマに関する自由連想（アクセ

ス)、(2) 連想項目間の類似度評定、(3)類似度距離行列によるクラスター分析、(4) 被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、(5) 実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する。その手続きは、(1) 刺激語の決定、(2) カード記入による連想反応語の生成と連想順位・重要順位の同定、(3) 各反応語の対の類似度評定による類似度距離行列の作成、(4) クラスター分析によりデンドログラム(樹形図)を作成、(5) 樹形図の各項目と全体の印象・下位構造について被験者が解釈、(6) 実験者によるクラスターの命名と総合的解釈、の各ステップをふむ。技法としては、“自由連想”“多変量解析”“現象学的データ解釈技法”の3つを組み合わせたものということができる。PAC分析は、開発された当初からカウンセリングや心理臨床への応用の可能性が指摘されていた。<sup>24)</sup>本研究においてこの調査方法を用いた理由は、被験者自身が自己報告によって得られたイメージの解釈を行うことから、アンケート調査や通常のインタビューでは得ることができない深層心理を探索できると考えたからである。尚、統計分析には SPSS Version. 15 を使用した。

## VI. 結果

本稿では、紙幅の関係上、一貫して積極的な参加姿勢を示していた学生2名と当初は参加に消極的であった学生1名の調査結果を紹介し、クラスター分析により得られたデンドログラムと、インタビューで参加者により報告された内容を彼らの言説を引用しながら、彼らが研修を通じていかなる「気づき」を獲得したのかを分析する。

### 1. 参加者 A の結果

Aは一貫して積極的参加姿勢を示した参加者の一人であった。参加者の中で唯一の4年生であり、研修申し込み時には就職が内定していた。参加を決めた理由は、1) 大学入学以前より、留学などに興味があったこと、2) 将来は、英語と中国語を使って海外で活躍できる人材になりたいという夢があり、今回の研修を今後のステップアップのきっかけとしたかったこと、3) 卒業前の今しか経験できないことだから、そして、4) 研修を通じて自信や度胸を身につけたかったからである。また、彼は、小学生の頃より野球を続けており、研修中の行事の1つであるシアトルマリナーズの試合観戦で、尊敬するイチローの活躍ぶりを確かめたかったという。過去の海外経験は、所属する研究ゼミの旅行で韓国を訪れたとのことであった。図1はAの分析結果である。ここでは7項目からなる2つのクラスターが出現した<sup>25)</sup>。

#### a. 参加者 A によるクラスターの解釈

##### a-1. クラスター I について

クラスター I は「感謝」から「友情」までの4項目である。「感謝」については、帰国後振り返ってみて、アメリカでサポートしてくれた先生やスタッフ、そしてホストファミリーに大変お世話

## \*\*\*\*\*HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS\*\*\*\*\*

Dendrogram using Ward Method

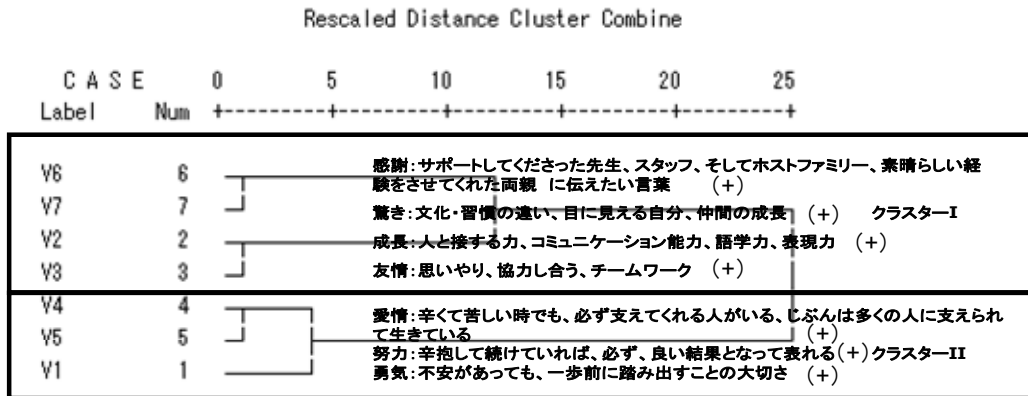


図1 参加者Aのデンドログラム

になったことを思い出し、その中で、自分自身の成長を実感することができ、帰国直前は、感謝の気持ちでいっぱいになったという。「驚き」については、共に渡米した研修仲間の大きな成長を感じ、また、彼らとの交流の中で、人と接することが苦手であった自分が、帰国後、人づきあいが好きになり、成長したことに対する驚きがあったこと、そして、アメリカ生活における文化や習慣に対する驚きを述べていた。この文化や習慣については、渡米前に抱いていたアメリカやアメリカ人に対するイメージと、実際にアメリカで生活をした後のイメージにおける共通点と相違点に関する発言があった。例えば、渡米前はアメリカの食事といえば、ハンバーグのイメージがあったが、自分のホストファミリーは毎日料理を変えるなど気づかいを見せてくれた。しかし、他の研修仲間の家庭では、毎日ハンバーガーが夕食だった学生たちも多かった。また、銃社会といわれるアメリカ社会に対して、当初は、怖いというイメージを抱いていたが、滞在先のポートランドはまったくといっていいほど、そのような雰囲気を感じさせないところで、人々の親切や温かさに驚きを感じたとのことであった。「成長」については、出発前は唯一の4回生ということで、学年が異なる仲間たちと良好な関係を築くことができるか不安であったが、「現地での経験を積むに従い、バラバラだった点が一つの線になるように感じ始め」、多くの人たちとの出会いや様々な経験ができたことが自信や自己の成長につながったということだった。最後に、「友情」については、自分の周りには友達がいる、彼らを含めて様々な人たちと接し、協力しあうことで全体のチームワークが生まれ、互いを思いやって行動したことが研修の成果に繋がったと報告した。



### a-2. クラスタⅡについて

クラスタⅡは残りの3項目の「愛情」、「努力」、「勇氣」からなる部分である。Aはこの3つが1つのクラスタとして纏まっている理由を次のように語った。

「最初、この語学研修に参加する前は、その、語学の壁とか、自分が行って大丈夫なのかという不安があったんですけど、もう、学生生活も最後なんで、ここは、行っとかなきゃ後悔するなって、一步踏み出した結果、やっぱり、こう振り返ってみて、やっぱり、あの時、一步踏み出してよかったなって、今、思ってます。で、ま、事前研修から、ずっとそうなんですけど、こう、語学を含め、少しずつ、こう努力していくことで、それも結果として、表れてくるっていうのもわかったし、やっぱり、その努力の過程で、やっぱり、辛い部分も出てくる中で、友人とか、ホストファミリー、先生、スタッフの方が、本当に暖かく支えてくれたという部分で、すごい愛情っていうものを感じながら、安心してこれまでの期間過ごすことができましたので、この3つも1つに纏まっているんじゃないかと思います。」

クラスタⅠとⅡとは、「1人の人間の周りに、仲間がいて、その仲間1人1人の周りにも仲間がいてという輪が成り立っていて、互いに支えあって生きているということがあってこそ、人間は努力でき、頑張ることができ、そして、ステップアップできることが自分にとっての驚きであり、そうして成長できた過程で出会った人々への感謝の気持ちも湧いてくるだろうし、それが、次の努力や勇氣に繋がっていく」点で共通しているとのことであった。また、2つのクラスタの異なる点として、クラスタⅡは、自分が中心となって働きかけていかなければならない内容で構成されており、これらの内容があつてこそ、クラスタⅠの内容に繋がっていくというイメージがあるとのことであった。

### b. 総合的解釈

以上から、クラスタⅠについては、「研修に関わった人たちにより実現した自己成長」、クラスタⅡについては、「積極的行動に裏打ちされた自己への挑戦」と命名できよう。図1が示すように、Aは7つの項目すべてにプラスのイメージを抱いていた。彼は、事前、事後研修を通じて、研修リーダーとしての役割を担っていた。インタビューの冒頭で、Aは元来の言葉の意味は違うかもしれないが、挙げられた各項目はその元を辿れば、全て1つに繋がっているイメージがあると発言していた。彼の場合、研修に対する肯定的イメージが自己のみに収束するのではなく、他者への思いへと派生しているところにその特徴が見られる。それは、クラスタⅠにおける「感謝」の項目の中の「サポートしてくださった先生、スタッフ、そして、ホストファミリー」、「素晴らしい経験をさせてくれた両親に伝えたい言葉」や、「友情」の中の「思いやり、協力し合う、チームワーク」といった言葉にも反映されている。

また、「成長」も彼の研修における気づきを知るうえでのキーワードとなっている。Aは、研修2日目にして、現地の大学からの帰宅途中で迷子になり、ホストファミリー宅を探し、夕刻から

夜間にかけての約3時間、見知らぬ町を彷徨い歩いた辛い体験があった。「愛情」の中の「辛くて苦しい時でも、必ず支えてくれる人がいる。自分は多くの人に支えられて生きている」という発言は、ここから由来した感情である。そして、この経験を克服したことが後に自信となり、自らの成長を促す一因となったのだった。その一例として、Aは帰国後の事後研修の共同作業の中で、リーダーとして優れた指導力を発揮し、後輩たちからも絶大な信頼を受けていることが、学生たちに対する観察を通じて知ることができた。また、渡米前までは人と関わるのが苦手であったが、帰国後、自らの意志で本学主催の外国語スピーチコンテストにも出場している。さらに、Aは研修を通じて見られた「成長」は、自分自身のみならず、仲間たちにも起こっていたと次のように語った。

「やっぱり、皆、あの、これに参加する前の気持ちとかを事後研修とかで述べてもらったと思うんですけど、その、みんなもやっぱり、不安、語学の壁もありますし、その、外国の方と3週間という期間接する中でたくさんの不安をかかえていたと思うんですけど。研修中にすごい不安な顔をする、ま、最初のほうに不安な顔をする仲間もいたんですけど、自分も含め、(中略)後半になるにつれて、すごい顔の表情が変わってきたというか、自分の、ま、経験を語るのが好きになったんじゃないかなと思って、すごい、その成長、皆の成長を感じました。」

上記は、彼がリーダーとしての役割を自覚し、研修に臨んでいたことを示す発言である。

## 2. 参加者Bの結果

Aと同様、当初より積極的参加の意志を示していたBは研修当時2回生で、過去にハワイとヨーロッパに家族旅行をした経験があったが、海外で生活した体験は今回の研修が初めてであった。参加目的は、1) 英語によるコミュニケーション力を向上させたいことと、2) 時期的に就職活動などを考慮しないで海外に行くことができる唯一のチャンスであったからだ。インタビューの結果、図2が示すように15項目からなる3つのクラスターが出現した。

### a. 参加者Bによるクラスターの解釈

#### a-1. クラスターIについて

クラスIは「スケールの違い」、「適応」、「興味」の3項目から構成されている。Bによると、この部分はアメリカ文化そのものを示しており、「文化のスケールが日本と違っていて、違うからこそ適応しないといけない、そして、それが興味深い」とのことであった。先述のように、Bは過去に海外経験はあったが、海外生活は今回が初めてであった。研修に参加する前は、日本だけ、自分の周りだけで世界が成り立っていたが、アメリカに行ったことで、異なった世界があることを発見したという。「適応」については、現地に行くまでは、日本では許されていても、アメリカでは誤解を招く行為などを知らないうちに自分が犯してしまうかもしれないことに不安を感じて

いたが、生活していくうちに自然に新しい生活にも溶け込めたという。また、「興味」に関しては、違う世界、知らない世界を見てみたいという好奇心、とにかく、自分が知らないことを知ってみたいという思いがあったという。

\*\*\*\*\* H I E R A R C H I C A L C L U S T E R A N A L Y S I S \*\*\*\*\*

Dendrogram using Ward Method

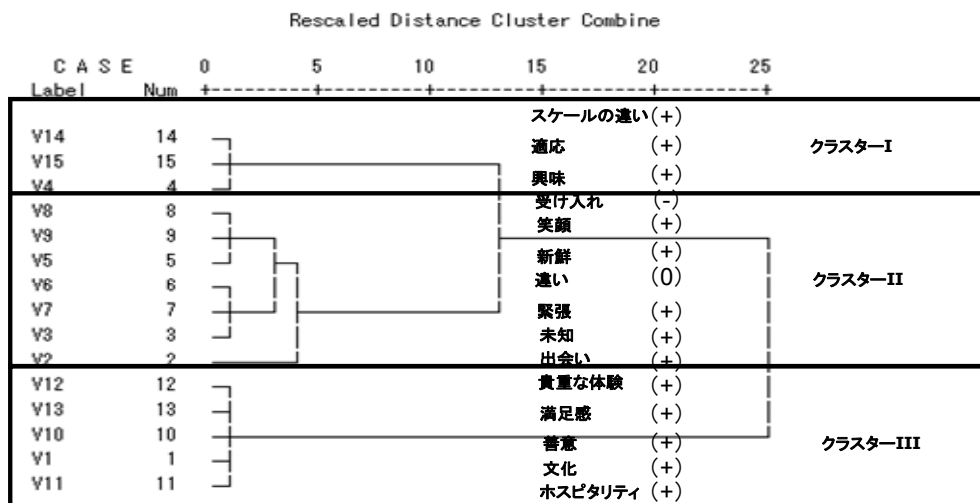


図2 参加者Bのデンドログラム

a-2. クラスターIIについて

クラスターIIは「受け入れ」から「出会い」までの7項目からなっており、この部分は、現地に行ってから感じたことで構成されているとのことだった。まず、「緊張」は、渡米直前まで続き、現地研修が始まった後も常に感じたことであった。研修を通じて初めて出会ったメンバーも含め、見るもの、出会う人すべてが「未知」であり「新鮮」であったという。「受け入れ」については、アメリカ文化における生活様式全般を受け入れることを示しているという。具体的には、言葉の違いがあることは当然であるため、英語だけでホストファミリーとコミュニケーションをとる努力をし、湯船につかることができなくても、シャワーだけで生活するといったアメリカ式のライフスタイルに従ったという。また、クラスターIIの「違い」は、クラスターIの解釈の部分でBによって言及された「日本とアメリカとの違い」ではなく、アメリカ文化内における家庭による違いを指していた。参加学生は研修中、1つの家庭に滞在することになっていたが、Bの場合、ホストファミリーの都合により、例外的に2つの異なった家庭に滞在することになった。インタビュー中、彼は次のように発言している。

「う～ん、そうですね。やっぱ、2つ行ったから良かったというのは、例えば（中略）1

つ目のファミリーはすごいアメリカらしいあれやったんですけど、その人でアメリカのイメージができてしまうところやったかなと。(中略) そのアメリカやからではなくて、その人やからそのファミリーなんやなと思いましたね。(中略)、他のメンバーは1つのファミリーだけなんでそれで、もし、次にどっかのホストファミリーとかに行ったら時に、アメリカやのこれかなあ、みたいなこと感じるかなと。違うファミリーもあるやんっていうのがわかったんで。それがよかったかなと。」

彼が滞在したホストファミリーは、日本とアメリカとの文化差の程度に匹敵するほど、異なったタイプの家庭であり、今回の経験によって、B が同じ文化内にも多様性が存在することに気づいたことがインタビューの中で感じられた。また、文化は異なっても共通のものとして、「笑顔」があることを悟ったとのことだった。

### a-3. クラスタⅢについて

最後のクラスターは「貴重な体験」から「ホスピタリティ」までの5項目であり、これらは帰国後に振り返ってアメリカに対して感じた事柄で構成されているという。研修中は貴重な体験の連続であり、満足度の高い内容であった。イチローを見ることを研修目的にあげていた参加者も多く、自分もその1人であったが、今、振り返れば、それは思っていたほど大した出来事ではなく、アメリカで生活した3週間に起こったすべての出来事が満足の対象であった。満足を感じた要因の中には、現地の人々の「善意」と「ホスピタリティ」の精神があった。そして、それを与えてくれた人たちはお世話になった2つのホストファミリーである。ここで、あらためて、文化の違いは国単位によるものではないことに気づいたということであった。

### b. 総合的解釈

ここでは、上記の結果から、クラスターⅠを「旅立ち前のアメリカに対する思い」、クラスターⅡを「異文化受容」、クラスターⅢを「文化再構築」と命名する。図2が示すように、クラスターⅡの「受け入れ(-)」と「違い(0)」以外の項目はすべてプラスのイメージであった。ここで、「受け入れ」がマイナスイメージとなった理由をBに尋ねたところ、この言葉から連想されることは「義務感」であるという。すなわち、当初は、アメリカ生活のすべてを受け入れなければいけないという義務感をもって研修に臨んだが、「実際に生活してみてわかったことは、もう少し、柔軟に行動してもよかった」という感想であった。「違い」がゼロのイメージであるのは、「違い」という言葉自体は辞書的な意味ではマイナスイメージがあるが、自分の場合は、その違いから様々なことを学べたことで、プラスイメージとなり、結局のところ、相殺してゼロになるとのことであった。

Bは、渡米前のアンケートの中で、「研修に期待すること」について、「米国のライフスタイルと考え方を学ぶこと」と述べ、また、「研修に対する姿勢」として、「全てを受け入れること」と

書いていたが、インタビューの結果からも現地研修の中でこれらを実践したことがうかがえる。今回の調査でインタビューした参加者の中で、彼がある意味もっとも円滑な適応を果たしたと筆者は感じたが、成功の理由の一つとして、文化差というものに対する認識も含めて、アメリカ生活における全てを受け入れるという異文化受容の姿勢が功を奏したものと考えられる。また、研修における彼の最大の気づきは文化というものを再構築して理解することができたことであろう。このことは次のような彼の発言の中にもうかがえた。

「やっぱり、何国やからいうわけじゃなくて、考え方とかは、少しずつ、あの、家庭によっても違ってきてるかなと。ま、もっと言うたら、個人によって違ってきてるかなと思います。おっかいもんとして、どここの人やから、みたいなんで変わってくるのは、食生活とかその言語だけで、考え方とかは個人、個人によって違ってくるんだと思います。同じ国でも家庭が違えば違ふし、同じ家庭でも、やっぱり、懐いてきてくれる人もおれば、ちょっと、フンって感じの人もおれば、やっぱり、人によりけりかなと。個々人が文化かなと。」

この発言は、単に文化の多様性に対する理解を示しているだけではなく、個々人が特定の文化に対して抱きがちな文化的ステレオタイプに対する見直しの必要性にBが気づいたことを示唆した内容である。

### 3. 参加者Cの結果

上記の2人とは異なり、Cは母親の強い勧めにより研修参加を決めた消極派の一人であった。彼女は研修当時3年生で、過去に海外経験はなかった。Bの参加目的は、1) 英語力の向上と2) 海外ホームステイに興味があったためであった。インタビューの結果、図3にあるように10項目からなる2つのクラスターが出現した。

#### a. 参加者Cによるクラスターの解釈

##### a-1. クラスターIについて

クラスターIは「積極性」から「日本の良さ」までの5項目であり、これらは日頃、自分が置かれている環境に関連した事柄であるとのことだった。「積極性」に関しては、日本の大学の授業とは違って、自ら行動しなければアメリカでは何も得られないと悟り、語学の授業では自分が少しでも疑問に思ったことは、たとえ英語が伝わりにくくても、積極的に手をあげて自ら質問をしたという。これは、「新しい事に対する挑戦」とも関連している。日本ではこのような積極的な行動に出ることは考えられないことだが、道で見知らぬ人にも「ハロー」と声をかける自分がいたという。彼女にとって、アメリカ研修は、このような積極性を培う場になったとともに、「家族の大切さ」や「日本の良さ」を再発見する機会も与えたようである。

「えーと、ずっと実家暮らしなんで、いつも家には親がいて、ご飯の時間になったらご飯が出てくるっていう生活で、自分が思ってることも、バンバン親に言ったりしてたんですけど、

\*\*\*\*\* HIERARCHICAL CLUSTER ANALYSIS \*\*\*\*\*

Dendrogram using Ward Method

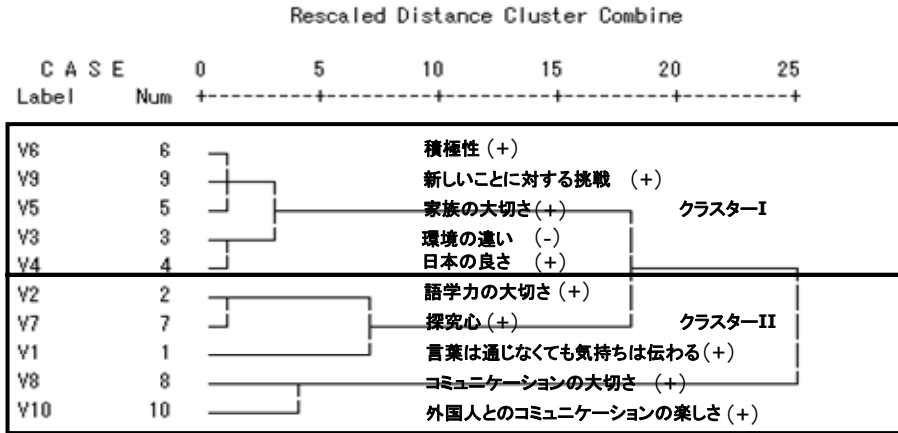


図3 参加者Cのデンドログラム

実際、親がいなくなると、家族がいなくなると、(中略)なんか、自分の中にたまっていることを聞いてもらえたということとか、家族としゃべっていること、しゃべっている時間とか、結構大事やなと思って。(中略)聞いてもらっている時間がすごい大切なんだなっていう。」

また、Cは「環境の違う」状況におかれて、交通の便、食べ物、言葉などの点で不自由のない日本の良さに気づいたが、それは、アメリカを否定してのことではない。このことは、ホストマザーと彼女の娘との関係に言及して、「日本とアメリカというように、たとえ環境は違っても、子供を思う親の気持ちは共通であることを発見した」という彼女の言葉からもうかがい知ることができた。

#### a-2. クラスターIIについて

クラスターIIは「語学力の大切さ」から「外国人とのコミュニケーションの楽しさ」までの5項目であり、これらは全体的にコミュニケーションの重要性が軸になっている内容であるとのことだった。Cは、研修を通して語学力の大切さを実感したという。人間関係の中で、相手を知りたいという探究心をしっかりともたなければ、知っていく喜びを味わえない。しかし、たとえ探究心があったとしても、言葉が通じなければ、聞きたいことも聞けず、相手が伝えてくれようとしていることも伝わってこない。もっとも、現地では、たとえ少々言葉が通じなくても、誠実に相手に思いを伝えようと努力すれば、伝わることも実感し、それが、現地の人たちと積極的にコミュニケーションする楽しみへと変わっていったようであった。もっとも、ここであげられた「コ

コミュニケーションの大切さ」はアメリカで出会った人たちとのコミュニケーションに限ったことではなかった。Cは、現地の人たちとの出会いはもちろんのこと、研修を共にした仲間とのコミュニケーションも大切な経験であったと次のように語っている。

「やっぱり1番大事やなて感じたのは、その、ホストファミリーとコミュニケーションをとることの大切さっていうのが、パツと頭に出てきて、でもよく考えたら、同じ語学研修に行った子ともこんなけ仲良くなれるって思ってなかったし、それは、やっぱり向こうへ行ってから、しゃべったり、(中略)もうちょっと皆のこともわかるようになって、仲良くなれたなって感じたので。コミュニケーションとらないとこの語学のメンバーとも仲良くなれなかったやろし、(後略)」。

#### b. 総合的解釈

ここでは、上記の結果から、クラスターIを「自文化への思いと新たなる決意」、クラスターIIを「コミュニケーションの重要性に対する気づき」と命名する。図3が示すように、クラスターIの「環境の違い」のみマイナスイメージであり、それ以外の項目はすべてプラスのイメージであった。「環境の違い」がマイナスとなった理由について、自分がこれまで住み慣れていた場所と異なる地域に行ったとき、最初は住みにくさを感じるからとのことだった。

先述のように、Cは母親からの強い勧めで研修への参加を決心した消極派であった。第2外国語として、フランス語を履修していた関係で、入学当初よりフランス語研修への参加を母親から勧められていたが、自分自身はあまり興味がなく、クラブ活動との兼ね合いもあり、3回生になるまで渡航を引き伸ばしていたという。そんなとき、友人が今回のアメリカ語学研修に参加することを知り、ようやく重い腰をあげた。そんな彼女だが、インタビュー時には翌年の夏休みに再びホストファミリーを訪れる計画を立てており、自分自身に起きた気持ちの大きな変化に本人も驚いている様子であった。このような変化を彼女にもたらした背景には、まず、滞米中に本人に探究心を持って、積極的に行動するといった態度および行動変容が起こったことが考えられる。それは、Cが2つのクラスター全体に対するイメージを「積極性」と「自分から動くことの大切さ」と表現したことからもうかがい知ることができる。彼女に起こった変化のもう一つの理由として、ホストファミリーとの親密な交流であった。

「全然知らない、言葉も通じない知らない人だったのに、私をすごい大事にしてくれて、私ももちろん、向こう理解しようとしてたけど、向こうも私の言うことにすごい耳を傾けて理解する努力を見せてくれたんで、本当に最後は、もう1つの家族やないけど、それぐらい思えるぐらい深い関係になったんじゃないかなと。」

彼女の場合、得られたクラスターの全体像は、「家族への思い」と「コミュニケーションの重要性」というキーワードで纏まっている感があるが、上記の発言から、ここでいう家族には日本の家族のみならず、アメリカのホストファミリーも含まれていることがうかがえた。

#### 4. 参加者のデンドログラムの項目の認知、情動、態度・行動変容による分類

上記で報告したように、PAC 分析によって 3 人の参加者から全 32 項目が得られた。そこで、得られたすべての項目を認知、情動、態度・行動変容の観点から参加者別に分類したところ、表 2 のような結果を得た。

以上の結果、全体的には、「認知」に関する項目がもっとも多くみられ（14 項目）、次に「態度・行動変容」（11 項目）、そして「情動」（8 項目）という結果となった。また、各参加者の結果に着目すると、A については、「情動」と「態度・行動変容」に関する項目が拮抗した結果となり、B については、「認知」と「態度・行動変容」に関して同様の傾向が見られた。そして、C に関しては「認知」に関係する項目が多く見られたことが明らかになった。

表 2 参加者のデンドログラムの項目の認知、情動、態度・行動変容による分類<sup>26)</sup>

	A <sup>27)</sup>	B <sup>28)</sup>	C
認 知	<u>驚き</u> （文化習慣の違い、目に見える自分、仲間の成長） （1 項目）	<u>スケールの違い、違い、未知、出会い、貴重な体験、善意、ホスピタリティ</u> （7 項目）	<u>家族の大切さ、環境の違い、日本の良さ、語学力の大切さ、言葉は通じなくても気持ちは通じる、コミュニケーションの大切さ</u> （6 項目）
情 動	<u>感謝</u> （サポートして下さった先生、スタッフ、ホストファミリー、すばらしい経験をさせてくれた両親に伝えたい言葉）、 <u>友情</u> （思いやり、協力し合う、チームワーク）、 <u>愛憎</u> （支えてくれる人の存在）、 <u>驚き</u> （上記の「認知」の内容と同じ） （4 項目）	<u>新鮮、緊張、満足感</u> （3 項目）	<u>外国人とのコミュニケーションの楽しさ</u> （1 項目）
態 度・ 行動変容	<u>成長</u> （コミュニケーション能力、表現力）、 <u>努力</u> （辛抱）、 <u>勇気</u> （一歩踏み出すことの大切さ）（3 項目）	<u>興味、適応、受け入れ、笑顔、文化</u> （5 項目）	<u>探究心、積極性、新しいことに対する挑戦</u> （3 項目）

## Ⅶ. 考察

PAC 分析を用いた調査の結果、本稿で取り上げた 3 名の調査協力者からは、最小 7 から最大 15 の連想項目が得られた。ここでは、異文化理解教育の鍵概念である認知面、情動面と態度・行動



面の観点から、結果の総合的考察を試みたい。表2が示すように、「違い」という言葉を含む項目が全員の回答に見られたものの、他の部分では内容的にかなりの多様性があり、それに伴って三者三様の結果を得ることができた。

まず、認知面に関して、アドラー<sup>29)</sup>は、異文化との初期の接触期では、文化的差異に興味を持つが、文化の深い違いは認識されないと述べている。例えば、このことを示す一例として、異文化接触をテーマにした過去の論文において、短期交流プログラムの参加者が認知した文化的差異は、現地のカリキュラムや参加した授業で扱われていた内容、授業方法、生徒の参加態度、施設および教育制度など、比較的目に見えやすい側面に関する内容が多く、学校文化内の生徒間の人間関係や考え方、授業以外の様々な行動特徴のような文化の深層に関わる内容に対する認知は見られなかったとの報告がなされている<sup>17)18)</sup>。

本稿で着目した認知面は上記の調査結果で見られるような文化的認知面に限ってはいない。より包括的な視点に立ち、自分自身に関することも含めて、参加者が研修によってどのような気づきを体験したかを探求する目的がそこにはあった。例えば、Aはリーダーとしての役割を果たす過程において、日本とアメリカの文化的違いはもとより、自分自身および後輩たちの成長に気づいた。また、Bは、2つの異なったホストファミリーと交流をもったことで、各家庭で生活様式や価値観が異なることを認識し、国単位ではない「家族」という文化の存在に気づいた。最後にCは、研修を通じて、家族の存在の大切さ、日本の良さを実感し、現地の人々や研修仲間との交流の中で、コミュニケーションの大切さに気づくことができた。

また、本調査ではデンドログラム上の各項目に対する3名のイメージはほとんどすべてがプラスイメージという結果を得た。すなわち、今回の調査協力者は、帰国後、研修に対して肯定的な感情をもっていたことになる。異文化接触の初期は、ハネムーン期とも称されるように、経験することすべてがよく見えてしまうことが多い<sup>29)</sup>。3週間という短期間の滞在であったために、今回の研修の参加者も、ちょうどそのような時期にあったという可能性がある。もう少し、滞在期間が長ければ、研修地や現地の人々とのより深い交流の中で、否定的側面にも気づき、それに応じてマイナスの感情も生まれたのかもしれない。また、今回の結果は英語研修の前後で米国人のイメージが否定的なものから肯定的なイメージへと変化したという先述の過去の調査結果を一部支持するものでもある<sup>19)20)</sup>。事前にアメリカに対するイメージを協力者に事前に尋ねていたわけではないが、特に、調査協力者のCにおいて大きな変化が起きたことは否めない。当初、日本を離れることを嫌がっていたCが研修の翌年に渡米を計画していることからそのことをうかがい知ることができよう。

最後に、態度・行動変容の側面について、Aは、実体験によって辛抱して努力することの大切さを認識し、それを実行した。Bにいたっては、日本やアメリカという大枠で捉えた主流文化（mainstream culture）も決して一枚岩ではなく、その中に存在するサブカルチャーの中にも違いが存在することに気づき、文化的ステレオタイプからの脱却を果たした。例えば、井上<sup>30)</sup>は、2ヶ

月間行われた「世界青年の船」の参加者に対して実施した調査の結果、「これまでのステレオタイプが打ち砕かれ、新たに自分のセンサーでインプットされた情報でステレオタイプを構築していった」(p. 18) と述べているが、B のケースもこれに相当すると考えられる。また、C は、英語の授業内での教師とのやりとりをはじめ、日常の状況で積極的にコミュニケーションをとることの重要性に気づき、それを研修中に実行した。以上のように調査結果から、彼らが今回の研修を通じて様々な「気づき」を獲得したことが明らかになった。

## VIII. まとめ

本稿では、PAC 分析という手法を用いて、2007 年に流通科学大学で実施された短期海外語学研修の参加者 3 名に対して行った調査結果を分析し、認知面、情動面、および態度・行動変容の側面において、どのような気づきを獲得したのかを検証した。その結果、研修が参加者たちに様々な変化をもたらしたことが明らかになった。箕浦<sup>31)</sup>は、海外に赴くことは、「個々人の内面の一部となった自国の意味空間を持ったまま、異文化の物理的・生態的・社会的環境に入り、そこに充満している意味世界に晒されること」(p. 131) であると指摘している。我々にとって文化とは無意識な存在である。外国に自らの身をおくことによって、自文化の尺度によって異文化に対する気づきを深めるとともに、逆に、異文化の尺度で自らの文化を客観的に見る機会を与えられる。今回の参加者にもまさにこのことが起こっていたのではないだろうか。短期海外研修の場合、その期間の短さのために、文化的認知を含むより深い段階での認知の獲得や異文化適応にまで至らない、また、大学主催の研修では大学が介入しすぎる結果、参加者にとって真の意味での自立した学びはもたらされないのではないかという懸念は確かにある。しかし、海外に出て、自分自身が「外国人」として扱われる経験は貴重なものであり、自分とは異なった視点で物事を見る可能性を知ることが異文化理解のうえでも有効であろう。また、言葉の自由に使えない環境の中、慣れない生活様式に適応しようとする段階で、曖昧さへの忍耐力や寛容的態度も培われるだろう。短期間、英語圏に身を置くことで、参加者たちのやる気を喚起させ、語学学習への良い動機付けになるとも考えられる。以上の効果を約 1 ヶ月という枠組みの中で、どの程度達成できるかは定かではないが、最大限の学びの効果を生むことを目標に現地研修はもとより、事前、事後研修のプログラムを充実させることが、指導教員および大学に課せられた使命であろう。

## 付録：2007年度米国海外語学研修スケジュール

日次	月日(曜)	スケジュール
1	8/27 (Mon)	<p style="text-align: center;"><b>出発日</b></p> <p style="text-align: center;">2007年8月27日(月)</p> <p style="text-align: center;"><b>集合案内</b></p> <p style="text-align: center;">関西国際空港4階国際線出発ロビー 中央団体カウンター 15・16・17</p> <p style="text-align: center;"><b>集合時間</b></p> <p style="text-align: center;">13時00分 時間厳守 (出発当日の緊急連絡先 0724-56-6655)</p> <p>利用予定航空会社：ユナイテッド航空(UA886便)</p> <p>UA886 関空(15:25)発 → サンフランシスコ(09:11)着 サンフランシスコにて入国・税関申告を済せ、 航空機を乗り換えてポートランドへ。</p> <p>UA562 サンフランシスコ(12:46)発 → ポートランド(14:27)着 到着後、ポートランド州立大学へ。</p> <p><b>Arrival Day</b></p> <p>Afternoon: pick up at airport 4:00 Portland State University orientation and introductions 5:00 homestay orientation 5:40 campus tour 6:30 to homestays <span style="float: right;">&lt;ホームステイ&gt;</span></p>
2	8/28 (Tue)	<p>(PSU staff meet buses)</p> <p>9:00-10:30 Academic Orientation 10:30-11:30 Homestay Orientation, part 2 12:00 Lunch 1:00 PSU Computer Lab access/ group photo 3:00 Homestay orientation, part 2 4:00 Go home by bus <span style="float: right;">&lt;ホームステイ&gt;</span></p>
3	8/29 (Wed)	<p>(PSU staff meet buses)</p> <p>9:00-10:30 American Conversation Class 10:30-12:00 American Culture Class 12:00 Lunch 1:00 Power Point Class #1 2:30 Culture Visit: MAX to NW 23<sup>rd</sup>/Pearl District 5:00 Go home by bus <span style="float: right;">&lt;ホームステイ&gt;</span></p>
4	8/30 (Thu)	<p>(PSU staff meet buses)</p> <p>9:00-10:30 American Conversation Class</p>

		10:30-12:00 American Culture Class 12:00 Lunch 1:00 Power Point Class #1 2:30 Culture Visit: MAX to NW 23 <sup>rd</sup> /Pearl District 5:00 Go home by bus	<ホームステイ>
5	8/31 (Fri)	9:00-10:00 American Conversation Class 10:00-11:00 American Culture Class 11:00-12:00 International Conversation Class 12:00 Lunch 1: 00 Power Point Class #2 2:00 Homestay Talk 3:30 free time 5:00 Go home by bus	<ホームステイ>
6	9/01 (Sat)	Weekend with Host Families	<ホームステイ>
7	9/02 (Sun)	Weekend with Host Families	<ホームステイ>
8	9/03 (Mon)	Labor Day National Holiday Free day with host families	<ホームステイ>
9	9/04 (Tue)	9:00-10:30 American Conversation Class 10:30-12:00 American Culture Class 12:00 Lunch 1:00 Power Point Class #3 2:30 Free Time 5:00 Go home by bus	<ホームステイ>
10	9/05 (Wed)	9:00-10:30 American Conversation Class 10:30-12:00 American Culture Class 12:00 Lunch 1:00-2:30 Culture Visit: Oregon History Center 3:00 Free Time 5:00 Go home by bus	<ホームステイ>
11	9/06 (Thu)	<b><u>Columbia River Gorge Day</u></b> - Vista Point - Multnomah Falls - Bonneville Dam - Picnic lunch <sup>Ⓞ</sup> - Fun at Rooster Rock Park 4:00 depart for PSU	<ホームステイ>

12	9/07 (Fri)	9:00-10:00 American Conversation Class 10:00-11:00 American Culture Class 11:00-12:00 International Conversation Class 12:00 Lunch 1:00-2:30 Culture Visit: Rose Garden 3:00 Free time 5:00 Go home by bus	<ホームステイ>
13	9/08 (Sat)	Weekend with Host Families	<ホームステイ>
14	9/09 (Sun)	Weekend with Host Families	<ホームステイ>
15	9/10 (Mon)	9:00-10:30 American Conversation Class 10:30-12:00 American Culture Class 12:00 Lunch 1:00 Power Point Class #3 2:30 Culture Visit: MAX to Waterfront + Gondola, ice cream <sup>Ⓞ</sup> Free time 5:00 Go home by bus	<ホームステイ>
16	9/11 (Tue)	9:00-10:30 American Conversation Class 10:30-12:00 American Culture Class 12:00 Lunch 1:00 Culture Visit: Visit Woodburn Outlet Mall 5:00 Go home by bus	<ホームステイ>
17	9/12 (Wed)	9:00-10:30 American Conversation Class 10:30-12:00 American Culture Class 12:00 Lunch 1:00 Power Point Class #4 2:00 Free afternoon 5:00 Go home by bus	<ホームステイ>
18	9/13 (Thu)	<b><u>Day Trip to Oregon Coast</u></b> 9:00 Depart to Seaside -Play on Beach -Eat Lunch on your own -Enjoy town -Shopping 3:30 Depart for PSU 5:30 Go home by bus	<ホームステイ>
19	9/14	9:00-9:45 Project Preparation Time	

	(Fri)	9:45 Final Skits 10:30-11:00 Project Preparation 11:00 Power Point Presentations 12:30 Lunch 2:30 Program Evaluations / Wrap Up Free time 5:30 Go home by bus	<ホームステイ>
20	9/15 (Sat)	Weekend with Host Families 5:00 Host Family Farewell Picnic at Laurelhurst Park	<ホームステイ>
21	9/16 (Sun)	<b><u>Baseball in Seattle, WA</u></b> 8:00-8:45 Host families drop off students and suitcases at PSU / say goodbye! 9:00 depart PSU 1:05 Seattle Mariners' vs. Toronto Blue Jays (Go #51 Ichiro!) Lunch at the game 4:30 Game ends/ fast food dinner in Seattle 6:00 depart for Portland 9:30pm arrive Portland/ check in to University Place Hotel	<ホームステイ>
22	9/17 (Mon)	<b><u>Departure Day</u></b> Check out/ morning free / Bus to airport - group check in - <b>security check/ boarding</b> U A 8 4 5 ポートランド(07:30)発 → サンフランシスコ(09:21)着 サンフランシスコで、航空機を乗り換えて帰国の途へ。 U A 5 6 2 サンフランシスコ(12:46)発 →	<機内泊>
23	9/18 (Tue)	関空(15:25)着 到着後、各自入国審査、税関申告を受けて、全員そろって解散。	

12.5 hours = American Conversation Class

12.5 hours = American Culture Class

2 hours = Int' 1 Conversation Class

4 hours = Power Point Class

6 culture visits

3 day trips

## 引用文献、注

- 1) 「国際協力・交流 留学生交流の推進」文部科学省資料 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/soshiki2/46.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/soshiki2/46.htm)
- 2) 「主要国における留学生受け入れ人数の推移」文部科学省中央教育審議会大学分科会留学生部会（第1回）資料4-2（平成14年12月）  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/007/030101/2-3.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/007/030101/2-3.htm)
- 3) 横田雅弘、白土悟、坪井健、太田浩、工藤和宏『岐路に立つ日本の大学—全国四年制大学の国際化と留学交流に関する調査報告』（文部科学省科学研究費補助金（基盤研究B）平成15-17年度調査最終報告書2006）
- 4) 「アメリカ留学の基礎知識（大学・大学院）」日米教育委員 <http://www.fulbright.jp/study/res/t1-college03.html>
- 5) 法務省入国管理局 平成20年6月資料「平成19年末現在における外国人登録者統計について」  
<http://www.moj.go.jp/PRESS/080601-1.pdf>
- 6) 井下理「異文化理解教育の方法」江淵一公編『異文化間教育研究入門』（玉川大学出版部, 1997）第11章 p. 204
- 7) 井下理「異文化理解教育の方法」江淵一公編『異文化間教育研究入門』（玉川大学出版部, 1997）第11章 p. 205
- 8) 井下理「異文化理解教育の方法」江淵一公編『異文化間教育研究入門』（玉川大学出版部, 1997）第11章 p. 206
- 9) 水田園子「異文化トレーニング」西田司、西田ひろ子、津田幸男、水田園子著『国際人間関係論』（聖文社, 1993）第13章 p. 235
- 10) “Intercultural Training Design”, *Intercultural source book: Cross-cultural training methods*, Vol. 1, edited by Fowler, S. M. & Mumford, M. G.(Intercultural Press, Yarmouth, Maine, 1995) p. 1
- 11) 八代京子「異文化理解の教育とトレーニング」本名信行、秋山高二、竹下裕子、ベイツ・ホッフア、ブルックス・ヒル編『異文化理解とコミュニケーション2』（三修社, 1994）5
- 12) J. Bennett: “Modes of cross-cultural training: Conceptualizing cross-cultural training as education”, *Intercultural Journal of Intercultural Relations*, 10 (1986) pp. 117-134.
- 13) 福本昌之「短期大学生の異文化理解に関する一考察—国際理解教育における短期留学型研修の意義と役割をめぐって—」, 『松山東雲短期大学研究論集』29 (1998)19-25
- 14) 桂真佐子「海外研修プログラムに関する調査研究—武蔵野女子大学短期語学研修における参加者の自己評価に関する調査報告」『武蔵野女子大学文学部紀要』3 (2002) 79-105
- 15) 但し、ここでは調査対象となったプログラムを、総じて「海外語学研修」と称されているが、調査の対象となったプログラムはいわゆる短期語学研修と現地の協定大学への協定留学の両方である。また、各プログラムの具体的な滞在期間が論文の中で示されていないため、結果についてはプログラムの種類と期間によって差が見られたことを付記しておく
- 16) 小池浩子「短期国際交流における高校生の異文化認知」『信州大学教育学部紀要』103 (2001) 105-111
- 17) 小池浩子「短期国際交流における高校生の異文化認知 II」『信州大学教育学部紀要』104 (2001) 77-86
- 18) 小池浩子「ホームステイを通じた高校生の異文化認知」『信州大学教育学部紀要』105 (2001) 75-83
- 19) 岩男寿美子、荻原滋 『日本で学ぶ留学生—社会心理学的分析』（勁草書房, 1998）
- 20) 徳井厚子「短期語学研修におけるコミュニケーションの意識とイメージの変化—ユタ大学夏期英語研修プログラムの事例—」『信州大学教育学部紀要』107 (2002) 25-33

- 21) 「文化特定」とは異文化トレーニングの中で、例えば、北米文化の価値観など、特定の文化に関する情報や知識に関する内容を扱う。
- 22) 「文化一般」とは、異文化トレーニングの中で、ある特定の文化に関する情報や知識を扱うのではなく、文化という概念そのものや、あらゆる文化に対応した内容を扱う。
- 23) 内藤哲雄 『PAC 分析実施法入門 「個」を科学する新技法への招待』（ナカニシヤ出版、2001）
- 24) 井上孝代、伊藤武彦「PAC 分析の活用の意義と課題」『心理学紀要』（明治学院大学）18（2008）47-56
- 25) PAC 分析ではインタビューの中で挙げられた項目に対して、「プラスのイメージ」、「マイナスのイメージ」、「ゼロのイメージ」のいずれをもっているかを調査協力者に回答してもらう手順がある。
- 26) 行動変容に関しては、突発的に行動が変化するとは考えにくい。まず、ある事柄に対する態度変容が起こり、それを行動に移すか否かという選択が生じると考えられる。このような態度変容と行動変容との密接な関係から、ここでは、「態度・行動変容」という1つのカテゴリーとして扱うことにする。
- 27) 「驚き」の対象として、「文化・習慣の違い」、「目に見える自分」、「仲間の成長」が挙げられている。「驚き」は、通常、「情動」に分類されるが、何らかの認知があり、そのことに対して「驚き」を感じると考えられる。A が挙げた項目と発言内容に基づき、ここでは「情動」と「認知」の両方に分類した。
- 28) 「認知」に関して、先述の B の発言にも見られたように、「スケールの違い」は日本とアメリカにおける違いを指しており、「違い」は2つのホストファミリーの違いを指している。「貴重な体験」については、一見、「行動」に属する項目のように思われるかもしれないが、ここでは、帰国後に B が感じたこととして、言及されているため、「認知」として扱っている。また、「文化」については、「国」レベルで文化を見なすというステレオタイプの文化概念を再構築したという意味で、「態度・行動変容」のカテゴリーに分類した。
- 29) P. Adler: "The transitional experience: An alternative view of culture shock", *Journal of Humanistic Psychology*, 15 (4) (1975) 13-23.
- 30) 井上孝代（代表）『世界青年の船事業における異文化接触経験への援助に関する実験臨床心理学的研究』平成 11・12 年度文部省化学研究費補助金（基盤 C）研究成果報告書
- 31) 箕浦康子「異文化体験と人間形成」『国際化時代の教育（岩波講座 現代の教育第 11 巻）』（岩波書店、1998）